

者、不及御免可乘、其外昵近之衆并医陰兩道或六十以上之人或病人等御免以後可乘、家郎從卒忝令乘者、其主人可為越度、但公家門跡并諸出世之衆者非制限、

一 諸国諸侍可被用儉約事、

富者弥誇、貧者恥不及、俗之凋弊無甚於此、所令嚴制也、

一 国主可撰政務之器用事、

凡治国道、在得人、明察功過、賞罰必当、国有善人、則其国弥殷、国無善人、則其国必亡、是先哲之明誠也、

右、可相守此旨者也、

慶長廿年卯七月 日

武家諸法度 (天和令)

武家諸法度

一 文武忠孝を励し、可正礼儀之事、

一 参勤交替之儀、毎歳守所定之時節、從者之員数不可及繁多事、

一 人馬兵具等、分限に応し可相嗜事、

一 新規之城郭構營堅止之、居城之隍壘石壁等敗壞之時は、達奉行所、可受差凶也、櫓塀門以下は如先規可修補事、

〔御触書寛保集成〕

一 企新規、結徒党、成誓約并私之関所、新法之津留、制禁之事、

一 江戸并何国にて、不慮之儀有之といふとも、猥不可懸集、在国之輩は其所を守、下知を可相待也、何所にて雖行刑罪、役者之外不可出向、可任檢使之左右事、

一 喧嘩口論可加謹慎、私之諍論制禁之、無扨子細有之ハ、達奉行所、可受其旨、不依何事令荷担は、其咎本人より重かるへし、并本主之障在之もの不可相拘事、

附、頭有之輩之百姓訴論ハ、其支配え令談合、可相濟之、滞儀あらハ、評定所え差出之、可受捌事、

一 国主、城主、老万石以上、近習并諸奉行、諸物頭私不可結婚姻、惣て公家と於結縁辺は、達奉行所、可受差凶事、

一 音信贈答嫁娶之規式饗応或家宅營作等、其外万事可用儉約、惣て無益之道具を好、不可致私之奢事、
一 衣装之品不可混乱、白綾公卿以上、白小袖諸大夫以上免許之事、

附、徒、若党之衣類は羽二重絹袖布木綿、弓鉄炮之者は袖布木綿、其外ニ至ては、万に布木綿可用之事、

一 乘輿は、一門之歴々、国主、城主、老万石以上并国大名之息、城主及侍徒以上之嫡子或は年五拾以上許之、儒医諸出家は制外之事、

一 **養子は同姓相応之者を撰ひ**、若無之におるては、由緒を正し、存生之内可致言上、五拾以上十七以下之輩及末期雖致養子、吟味之上可立之、縦雖実子、筋目違たる儀、不可立之事、

附、殉死之儀、令弥制禁事、

一 知行所務清廉沙汰之、国郡不可令衰弊、道路駅馬橋船等無断絶、可令往還事、

附、荷船之外、大船は如先規停止之事、

一 諸国散在之寺社領、自古至于今所附来は不可取放之、勿論新地之寺社建立弥令停止之、若無扨子細有之は、達奉行、可請差凶事、

一 万事応江戸之法度、於国々所々可遵行事、

右条々、今度定之訖、堅可相守者也、

天和三年七月廿五日

鎖国令（寛永十年令）

覚

一 異国え奉書船之外舟遣之儀、堅停止之事、

一 奉書船之外日本人異国へ遣し申間敷候、若忍ひ候て乗参候者於有之ハ、其者ハ死罪、其舟并船主ともに留置、言上可仕事、

一 異国え渡り、住宅仕有之日本人来候は、死罪に可申付候、但不及是非に仕合有之て、異国ニ逗留いたし、五年より内に罷帰候者ハ、遂穿鑿、日本にとまり可申に付てハ御免、併異国え亦可立帰におゐては、死罪に可申付事、

一 伴天連宗旨有之所々えは、従兩人可申遣事、

一 伴天連訴人褒美之事、

上之訴人には銀百枚、それより下には其忠にしたかい、可被相計之事、

一 異国舟申分有之て、江戸え言上之間番船之事、如此以前大村方へ可申越事、